

洞察に富む〈一般論〉表現と共に

——イヴォ・アンドリッチの『ドリナの橋』⁽¹⁾を読む

森 田 孟

ボスニアとセルビア両共和国の国境をなすドリナ川⁽²⁾には、河畔の小さな町ヴェシエグラードに有名な橋がある。この橋の建設の由来から第一次世界大戦勃発までの、延々約三世紀半に亘ってこの町を中心に繰り展げられる大河小説、それが、イヴォ・アンドリッチ (Ivo Andrić, 1892-1975) の傑作『ドリナの橋』(Na Drini ćuprija, 1945) である。アンドリッチにはこの作品を主な対象として、一九六一年度のノーベル文学賞が授与された。人物と出来事が次々に躍動する物語の多彩な濃密ぶりは、正しく授賞理由の「自国ユーゴスラヴィアの歴史からの主題と人間の運命を描写した叙事的な力量」⁽³⁾の、体現そのものである。

山間の激しい急流で知られるドリナ川は、中流、上流部を山々に囲まれていて、渡河点はヴェシエグラードしかなかった。

この町の近郊ソコロヴィチ生まれのソコル・メフメド・パシャ(一五〇六―七八)も、十歳になった年の秋に、将来のトルコ親衛隊イエニチェリ軍団⁽⁴⁾の幹部候補として拉致される際、橋のない渡し場を古びた舟で渡ったのだった。彼はその後スルタン・シュレイマンを補佐する大宰相となり、一五六六年から一二年間、オスマン・トルコ大帝国の舵を取った。その彼が、少年時に不愉快な思いをしたあの渡し場に架設させたのが、堅牢な美しい石造の「メフメ

ド・パシャ・ソコロヴィチ橋」、即ち「ドリナの橋」である。五年間の難工事の末、悲しい人柱の伝説なども生みながら、一五七一年に完成した。橋の全幅七・二米、全長一七〇米、アーチの連数は一一経間、純径間の最大一一・七九米、橋の真中にカピア (Kapia) 「門」と呼ばれるテラスが張り出し、その一角に人の背丈を越す壁が立ち、橋の由来を記す銘文が刻まれている。⁽⁵⁾ カピアは町の住民のみならず通行人全ての一休み、憩いの場となり、談笑、議論のための留り場、行商の売り場にもなった。往時、事件や戦乱が起るたびに、布告の張り出される場所となり、処刑された生首が晒される所であった。それら悉くを、カピアを中心とするこの橋は、見続け、聴き続け、記憶に留めてきたのである。

『ドリナの橋』には、一二〇人余の人物が次々に登場し、その現れ方に濃淡はあつてもいずれも入念・微細な人物造型がなされて描き分けられてゆく。活写される彼らが織り成す物語の豊饒さを支えるのは、生彩に富む具体的な描写に他ならないが、その中に、私が〈一般論〉と呼ぶことにしたい、時には金言・箴言じみさえする印象深い表現が、所を得ては立ち混じって現れ、その都度、作品を深めてゆ

く趣が感じられる。本稿ではそれに注目してみたい。

橋の難工事を伝え聞いていた人々は、水の精が工事の邪魔をして、昼間造られた箇所を夜間に壊したのだと知っている、という叙述に、ひょいと、「いつの世、どこでも工事とあらば誰かが邪魔を入れるものと相場が決っている」(一・一六)と一般論風の文言が現れる。確かにその後、橋の建造に反対して工事中の橋を破壊しようとして捕らえられ、残虐に処刑される賦役農夫のラディザヴが登場する。その顛末は、それこそこの作品の一大特色が発揮されて、微に入り細を穿ちて、第三章の後半に詳述される。

橋の真近の丘には、ラディザヴの墓と呼ばれる所があるが、彼は強力無双のセルビアの勇士で、宰相がドリナの橋を架けようとした時、大方の人々は畏まって賦役に応じたが、ラディザヴだけは宰相にこの架橋を思い止ませようと頑強に抵抗して手古摺らせた。辛うじて彼を殺害して工事に着手できたのだとある(一・一八)。第三章で実際に活写されるラディザヴとは、同名である以外まるで別人のようにその姿が異なるが、後者のラディザヴを民衆は、「陰

謀と反抗を企み、橋を壊す勇氣を持った男」(三・四七)と
思っていたのに、意想外に貧弱な人物であるのに驚くのだ
(同)。人間の伝承される姿と実像とは違うものだという事
実が、一つの典型としてさり気なく提示されている。

生きたまま焼き串に刺された小羊のように体を杭で貫か
れて岸の土手に高々と晒された(三・五〇) ラディザヴを、
町の人々は、その死体の番人を巧みに買収して引き取り、
丘の上に埋葬したのだった。この辺り、《人間》が絶妙に
描出されていて、舌を巻くしかあるまい。

他の多くの事件は何世紀も記憶し語り伝えてきた町なの
に、肝腎な橋の工事そのものについての些事が残っていな
いことについて、「民衆というものは自分で理解でき伝説
に作り変えられるものだけに留めて語り伝えてゆく。他
のものは全て大した跡も残さず、まるで名もない自然現象
でもあるかのように黙殺されて、その脇を通り過ぎてしま
うのだ」(二・二七)。苦勞の末に橋が完成してみて初め
て、この立派な橋を空想の物語で飾り始める。「彼らには
情況に応じて物語を器用に構成し、長く保持する才能があ
るのだ」(同)。作者自身の、「彼ら」を代表しての「物語」、
それがこの『ドリナの橋』なのだ、最初の二章で言挙げ

されたのである。

橋の建造が本決りとなって、工事の総監督と配下の建築
主任がまず町にやってくるが、この主任は「自分の仕事の
ことしか考えず、人生と世界の他の事象は見もせず感じも
せず理解もしない人間特有の「大きく黒いビロードの光沢
を放つ」美しい近視の眼」(三・二九)をしていた。しかし
完成したものは、人生と世界の事象悉くを見詰め、感じ取
り、理解する、遠くに届く眼をもつ《橋》だったのだ。

橋は造れないようだと様々な噂が広まった時には、「民
衆とは簡単に色んな話を考え出し広める。しかし現実はその
ういう物語と奇妙に離れ難く結びつき混り合っているもの
だ」(三・三六)と述べられる。現実から決して余り遠く
に離れない民衆への洞察である。

橋の工事が進行せず横道に迷い込んでいると人々に思わ
れ出した時には、「自分では何も働かず、生涯に何の大仕
事も手がけないような人間は、他人の仕事を批判する段に
なるとすぐに辛抱をなくし、誤解をするものだ」(四・六
二)と、痛快な一節が現れる。

遂に堂々たる十一箇のアーチに全体が乗った橋の全貌が
目眩くばかりの美しさに輝いて市民の眼前に現れると、

「ヴィシエグラードの人間は貶すのも早いが褒めるのも早い」(四・六五)ので、人々はこぞって感嘆したが、やはり相変らず工事とそれを讃える人々を見下す人物はいた。それに對して、「ある種の人々の心には、他人には思いつけないほど大きくて強烈な、それでいて根拠のない憎悪と嫉妬が存在するものなのだ」(同)と言われたと、この悲しくも確かな人間觀に、肅然と天を仰ぎたくなるだろう。

件の人物は、この橋はまだ大水を知らん、ヴィシエグラードの真物の洪水を、あとに何が残るか見ものだろう！と言のだが、この橋はその後何度も大洪水に呑み込まれながらびくともしない雄姿をまた現し続けるのである。

大洪水に逢うたびに人々はその被害を乗り越えたが、その苦難の経験は人々を繋ぐ絆になった。「揃って苦しみ無事に切り抜けた不幸ほど人々を互いに結びつけるものはない」(五・七五)し、「思い出が辛く惨めなものであればある程、話す喜びは大きかった」(五・七六)。

町に大損害を与えた洪水で水没した橋も、水が引くと以前と変らぬ白い雄姿を陽に光らせる。町じゅうが損害の修復に着手しながら、人々は、大洪水に打ち勝った橋に、如何なる自然力にも譲歩しない確かなものが自分の人生に

在ったのだと知る(五・八二)のだった。人々はこの町の無意識の哲学——人生とは絶えず消耗し流れ去る捉え所のない奇妙なものだが、それでも「ドリナの橋」のように確乎として存続するものだという哲学を、体得したのだ、と第五章は締め括られる。

十九世紀の初めにセルビアで反乱が起こる。その噂は直ぐ町に届く。「反乱や陰謀のない権力は存在しない、財産があれば必ず心配や損失があるように」(六・八二)。自然に説得力のある事実である。続いて次のような一般論が展開される。「支配し、支配するために抑圧しなければならぬ人々には、理性で支配する義務がある。激情に駆られたり敵に強いられて理性による抑制の限界を越えれば衰え始め、それで自らに破滅の道を開くのだから。他方、抑圧される者搾取される者は、条理に叶うことも叶わぬことも易易と利用する。この二つは抑圧者に対する、密かにしろ公然とにしろ、戦いなるものに対する二つの武器に他ならないからだ」(六・八四)。アンドリツチは外交官として長らく活躍した作家なのだ。面目躍如たる鋭い認識だ。

町に常備兵が駐屯し、ドリナの橋の警護のために兵士たちは、橋の中央に木造の防舎を築き始める。そこでさり気

ない一文、「世界中どこへ行つても軍人という連中は、自らの目的と当座の必要のために、後から市民生活と平和の必要という眼から見ればわけの分らぬ馬鹿氣た建物を作るものだ」(同)。成程、そうか。

近くで反乱が続く間、偶然に防舎に入り込んでしまった旅人と、近隣の村にいたセルビア人の青年とが、反乱者の一員と誤認逮捕され、処刑されてしまう。その経緯が例の如く詳述されるのだが、その後、弱者・不注意者を破滅させる「あの偶然」が、「世間知らずで貧乏で無邪氣な二人の単純な人間」をその後、に続く処刑死体の先鞭にと望んだのだ。「何故ならこの種の人々は、一番最初に渦巻に眼が眩んで引き寄せられ呑み込まれてしまうのだから」(六・九〇)と結論づけられる。

セルビアの反乱が鎮まるまでカピアには生首が常に二、三晒されるのだが、「人間というものはこういう時代に生きたらば、直ぐに心が荒び無感覚になる」(六・九二)。市民もすっかり慣れて首に無関心になり、首を晒すのが中止されても直ぐにはそれに気付きさえしなかった、と叙述される。人間と時代についてのさり気ない痛烈な洞察である。

橋が遭遇するのは、戦乱、疫病、難民の列だけではなく

く、異常な事件もあつた。第八章で詳述されるのは、その、町を震撼させその後伝説のように他所にまで広まった出来事である。町の両端の、各名家の若い男女の結婚について物語だ。結婚式の当日、婚家へ向かう途中、橋の上のカピアからドリナ川へ、花嫁となる女性が、行列から飛び出して投身自殺を遂げたのである。この、頭が良くて弁の立つ高嶺の花の絶世の美女ファタの周りには、いつしか「讚嘆と憎悪、嫉妬や口にし得ない願望、意地の悪い期待の混じつたあの雰囲氣が形成されたが、非凡な才と非凡な運命を背負つた人物は、大抵こういう目に会う」(八・一〇五)のだと概括される。いちいち尤な認識である。この事件には諸説が紛々と流布したが、「なにしろ民衆というのは、余りに高く登り過ぎた人間の墜落を話題にするのが好きなのだ」(八・一〇八)。

ファタの屍体は下流の砂州に打ち上げられ直ぐ最寄りのトルコ人墓地に葬られたが、その夜は町の閑人たちの好奇心を満足させた。「この好奇心たるや、空虚で何も美しさのない人生、ごくつまらない平凡な人生しか持たぬ人々には、特に發達しているものである」(八・一一二)。

一八七八年夏、セルビアはまた戦乱に襲われる。町に乗

り込んできて、反オーストリア抵抗運動のための武装蜂起を煽る人物と町を代表して反戦を主張する住民との対立で、激しい混乱が増す一方となる。「世間全体が恐れおののき、仮借なき大変革が進行中の時には、このような病気が欠陥をもつ人間が現れて、物事を邪道へ導いてゆくのが普通なのだ。不穩の時代の一特徴である」(九・一一六)。

主戦論者は、説得できない反戦論者を敵への如く憎むのだが、それに対しては、「圧倒的な敵を近くに控え、大敗北を目前にした場合には、運命の烙印を押されたどんな社会にも、この種の同胞に対する憎悪と内部の争いが生まれるのが、世の習いなのだ」(九・一一八)。

橋を防護する若い兵士の一人が、妖美な少女に魅惑されて失態を演ずる悲劇も生ずる。御尋ね者の有名な匪賊が老婆に変装して橋を通過して逃亡するのを、この少女が巧妙に援けるのだが、件の青年兵士はそれを見逃してしまい、その罪を償うのに自殺してしまふ。第十二章で詳述される挿話であるが、「乱世が何者かの不幸なしに過ぎることはない」(二三・一五七)のだ。

徴用されてゆく新兵たちに一族の者がいなくても、彼らを見送る住民の女性たちは涙を流す。それへの一言は、

「女とは何とか理由を作って泣くことが出来るものだ。そして他人の悲しみを思つて泣く時が、一番甘美なものなのだ」(二三・一七二)。女性の読者よ目を斜くなかれ、密かに北叟笑む男性共に対しても。

新しい時代になつて生ずる変化も、住民は次第に受け入れてゆく。その有様を詳述しながら、「民衆というものはそういう変化なしでは生きていられないらしい、特にこの国では」(二四・一七四)。

町に新たに出来た「橋ホテル」を、人々が、それを切り盛りする女主人の名で「ロッティカホテル」と通称するのは、「民衆というものは自己流の論理に従い、それが自分に対してもつ実際の意味に従つて何にでも名をつけてしまふもの」(二四・一七七)と述べられるが、これはホテルの名に限らず、民衆の本質を広く暗示・象徴した言だらう。この作品、民衆への鋭い目が的確に光り続ける。

酒場で人気者の芸人や道化者が微細に描写される際には、「彼らは芸術を知らない国の芸術家のようなものだ、狭い歪んだ精神生活をもつ市民たちの、自認はしていないが永遠の必要物なのだ」(二五・一八九)と、ここでも(人間)への洞察は鋭い。

無政府主義者について解説する町の回教徒の高校長の雄弁に紛れ込ませての人生論がある。「この世に憎悪のない親切、嫉妬のない偉大さなどはない得ない、どれ程小さくても影のないものはないのと同じ理屈だ、これはとり分け、衆に優れて偉大、敬虔、かつ著名な人々について言えるのだ」(二六・二〇三)。

皇后エリザベートが、イタリア人の無政府主義者ルツケーニに暗殺されたと報じられたので、町の唯一のイタリア人住民ペロ親方は、肩身の狭い思いに苦しむが、この親方を町の子供たちは「ルツケーニ」と呼び立てては苛めるのだ、わけも分らずに。それもただ、「弱くて傷つき易い者からかい、苛めてやろうという子供特有の要求から」(二六・二〇三)。しかもそれも、そのうちやめたのだった、他の遊びを見つけたために、と。子供への、そして、世の大人の苛め屋どもへの、普遍的真理を衝いている。苛めとは要するに、幼稚な脳足りんの所業以外の何ものでもない。

一九〇八年、オーストリア＝ハンガリー帝国がボスニアとヘルツェゴヴィナを併合する布告が出る。と、「政府というやつが告示で市民たちに平和と福祉を約束する必要を

認めた時には、すぐに用心してその反対のことを待ちかまえなければならぬ」(二七・二二〇)と述べられる。果せるかな、直ぐに軍隊が移動してきて駐留する。橋にも橋脚の基部に爆薬が仕掛けられることになる。戦争が始まって橋の爆破が必要になった時に備えて(二七・二二一)。「この爆薬が、一九一四年には、飛んできた砲弾によって破裂して、ドリナの橋も破壊されるのだ(二四・三二二)」。

爆薬を仕掛けに来たのは、この町出身で皇帝軍の曹長になった男だったが、静かにそれを阻もうと反論する町の有力者に、件の曹長は、両手を広げて肩をすくめるだけ。唇を噛みしめて眼を伏せるので、彼の顔には狡猾で鄭重な表情が浮かぶが、それは「老いすぎてぼろぼろになった官僚機構で——そこではとくに慎重が無気力に、精励が卑屈に変わっている——長年勤め上げた人間の表情」であり、「こういう顔の沈黙の慎重さに比べれば、一枚の白紙も何巻の書物ほどにも語りかけるものだ」(二七・二三三)とは、実に入念な観察に基づく辛辣な表現で、感じ入るしかない。この皇帝の兵士は、しかし直ぐに「ウィーンの人の良さ」とトルコの鄭重さが二つの水流のように混じり合ったあの自信たっぷりな微笑」(同)を取り戻して、「よく選んだ

言葉で相手の健康と若さを祝い、やってきた時と同じく愛想たっぷりに去っていった」(同)のだった。官僚の典型とは、世界中で、普遍・不変なのだ。何という見事な別袂であり描写だろうか。

一九一二年秋にはバルカン戦争が始まり、翌一九一三年にはトルコにセルビアが勝利する。町から十五キロ米の所にあつたトルコ国境が、突然千キロ米も後退するなどの、短時間における凄まじい変化が起こり、ドリナの橋の意義は変わるものの、橋そのものは、あの建築主任が造り上げたままに、雄々しく美しく永遠に、全ての変化に超然として立ち続けるのである(一八・二二九)。橋の変らぬ佇まいは、実はここだけでなく、作中到的所で言及、説明されており、この作品の主人公は、標題が明示する以上に、橋そのものであることを、作品が全体で強調しているのだ。

町で進行する恋愛も詳述・描写される。一つは、駐屯軍の司令官夫人とその連隊付きの若い医官の公然たるそれだが、確かに「恋人たちにとって時間はいつも短かすぎるとし、どんな道も長すぎることはない」(一九・二四八)。

夏休みに帰省中の学生と町の女教師との恋愛の経緯の詳述中には、次のような一般論が挿入される。「自分から愛

していない者は、他人の愛の大きさも嫉妬の力も、そこに潜む危険も感じ取ることは出来ないものだ」(一九・二五〇—二五二)。

若者たちの恋愛に纏わる不和と和解の挿話も事細かに描出されるが、そこには「若者とは恋の戯れや恋の思いのない退屈な孤独より、どんなに苦々しく希望がなくなるとも、恋の争いのほうを好むものだ」(二一・二七三)なる、青年と恋愛への、機微に触れた洞察が現れる。

また、「恋をする女というものは、たとえ惨めな幻滅を覚えたとしても、授けられなかった子を愛するように、自分の恋を慈しむものだ」(二一・二七四)という、巧妙な譬喩を用いた断言もなされる。

遂に一九一四年、ドリナ川に架かる橋の運命が終る年が来る。幸先よく始まった夏であり、あらゆる面で今までの年の損害と不幸を償ってくれる筈だった。しかし、「人間の全ての弱点のうち最も始末が悪く、「嘆かわしく」最も悲劇的なものは、疑いもなく、将来を見通す能力がないということだ。これは人間の幾多の能力、芸術、学問に、はつきりと矛盾する」「とは著しく相違する」(二一・二六六)。

この恵まれた夏の初めに、「不安と悲しみの短い影」(二

一・二七二)が落ちかかる。以前のトルコ・オーストリア、今のセルビア・オーストリア国境の一小村で、腸チフスが流行する。ヴィシエグラードの件の、司令官夫人の愛人だった軍医が治療に向き、彼の適切な処置で十五人の患者のうち二人だけの死に留めたが(こういう微細・具体的な詳述がこの作品の底部をしっかりと支えている一例として、本稿は態々ここで言及した)、この軍医自身が感染して予期しない併発症で死んでしまった。これを手初めに、フェルディナント大公と大公妃の、サライエヴォでの暗殺から、第一次世界大戦が始まることになる。

この暗殺が、セルビア人青年によるものだったことから、セルビア人及び彼らと関係のある者全てへの狩り立てが始まり、人々は追う者と追われる者に分れた。「人間の内部で眠り、良風と法律のダムが除かれな限りは顔を出すことを許されないあの餓えた野獣が、今や鎖をはずされたのだ。合図は出され、ダムは取り払われた。人類の歴史には幾度となく暴行、掠奪、いや殺人さえも黙許されてきたのだ。それがより高い利害関係の名のもと、決ったスローガンのもとで、特定の名と特定の確保をもった限られた数の人間に対して行なわれるという条件で」(二二・二八

二一八三)。

セルビアに宣戦布告された翌日には、早速自警団の一隊が町をパトロールし始めるが、町でも屈指の家系と信望を誇るアリホジャ・ムテヴェリチの店には、ヴィシエグラードの主だった回教徒が数人集まって、当局から要求された自警団に自分たちも加わるか否かを議論する。その時の彼らの顔に浮んでいる「不安で青ざめ、あの重く痙攣する表情」は「思いもかけない事件と大変動を目前にして何か相当な物を失う羽目に立たされている人間がいつも見せる表情だ」(二二・二八四)と描述されるのだ。人間を鋭く詳細に観察し続けてきた作者にして初めて可能な、心の裡が表れる顔の表情への把握である。

ヴィシエグラードの町も戦争に巻き込まれ砲撃に晒されるようになる。立派な広い邸宅に住むミハイロ・リステイチは、避難してくる客人たちを心よく迎え入れて、昔話をしながら飲み物で慰め続ける。

こうして「彼らは昔ながらの、「昔から受け継いできた」本能に導かれて、人生をその時々々の印象と直接の必要へと分解し、すっかりその中に没入してしまうのだ。そうしてのみ、つまり、前も後も見ないで各瞬間を一つ一つ生き延

びることだけが、この人生を耐えやすくしてくれ、人間も来たるべき良い時代をあてにして身を持することが出来るのだから」(二三・二九八―九九)と続けられるこの一節こそ、この作中で延々と詳述・描出されてきた三世紀半に及ぶ人々の、人生の信条だったのである。

住民の大部分が、両軍の砲火に挟まれた町をとっくに去った後も、ドリナの橋は戦火を交える二つの世界の間にも凜然と立っていたが、遂に砲撃を受けて一部が大破する。

カピアのすぐ背後で、橋は切断されていた。七番目の橋脚が消えていた。六番目と八番目の橋脚の間がぼっかり開いている。八番目の橋脚から先は昨日まで同様、対岸まで滑らかに真っ直ぐ白く続いていて、緑色の水面がきらめいていた(二四・三二二)。

自営の店で一休みしていたアリホジャは、突然屋根から突き抜け落ちてきた頭ほどの重い石に驚愕して外へ飛び出したが、その時に彼の眼に映った橋の姿、それがこれである。彼の店に落下したのは、飛散した橋脚の破片だった。

茫然自失の態で、坂の上の自宅に戻ってゆく途上、アリホジャが息絶えて、この全二四章から成る大河小説は幕を閉じる(二四・三二四)。

要所、要所で、(一般論)表現で駄目を押されても、それを押し付けがましいとは少しも感じさせずに納得させて、作品の深みを、真価を、読者に実感させてゆくのは、作者の、(人間)とその世界への鋭い洞察力に支えられた筆力の、賜物と言えるだろう。作中人物の造型の見事さについては、稿を改めたい。

注

(1) Ivo Andrić, *The Bridge on the Drina*. Translated from the Serbo-Croat by Lovett F. Edwards. With an Introduction by William H. McNeill. The University of Chicago Press, 1977 (Translation © George Allen and Unwin Ltd, 1959) 松谷健二訳『ドリナの橋』[現代東欧文学全集12] (恒文社、昭和四一年)

本稿は右の、流麗な英訳と格調高い達意の邦訳に依る。共に原文のセルボ・クロアート語からの訳だが、逐一対照の結果、内容は見事なまでに殆ど一致していると観たので、日本語での本稿ゆえ、本稿での作中の言及・引用は、日本語訳に敬意を表してそれに極力依拠した。但し、語彙・文字違い等、本稿筆者の文体への同化の都合上、松谷訳そのままではないところのあるのは、他意のない

故、御海容を乞う。本稿文中、引用箇所の中の「」の部分は、英訳にある部分で、邦訳との若干の違いを敢えて示してみたにすぎない。

尚、引用のページ表示は英訳版のもの。例えば（一・三〇）は第一章で、三〇頁の意味。

(2) The Drina 上流はタラとビヴァ二つの支流から成り、源は共にモンテネグロの山頂に発し、ボスニア・ヘルツェゴヴィナ東部を北流してサーヴァ川 (The Sava) 「旧ユーゴスラヴィア北西部から東流してベオグラードでドナウ川に合流する九四〇キロ米の大河」に合流する全長三三六キロ米の川。因に日本最長の信濃川は三二七キロ米。

(3) 『ノーベル賞文学全集13、ラックスネス、カミュ、アンドリッチ』（主婦の友社、一九七二年）二四八―五六頁、及び、前掲恒文社版五―二六頁の入念詳細な「アンドリッチの人と文学」（木村彰一・栗原成郎 著）参照。

(4) 「イエニ」は小アジア語で「新」、「チェリ」は「兵」。十五世紀から制度化されたオスマン帝国の特殊軍団。東南欧の被征服地、特にキリスト教徒の居住地から五年目ごとに、十―十五歳の美しく健康で頭の良い者を選んで強制徴収して首都コンスタンチノープルで回教徒として訓練・教育し、成人後、常備軍に編入してスルタンに仕えさせる。奴隸ではあるが諸特権を与えられ、一部は宮廷の高級官僚や政治上の大官になる者もいた。前記恒文社

版、一一頁他。

(5) 成瀬輝男『ヨーロッパ橋ものがたり』（東京堂出版、一九九九年）五二頁。尚、『ドリナの橋』では、邦訳では「長さ二百五十歩あまり、幅は十歩ほど」（三〇頁）、英訳では“about two hundred and fifty paces long and about ten paces wide” (p.14) で、どちらも二百五十歩、十歩である。少し小さい歩幅で測られているみたいだ。

(6) アンドリッチは、一九二四年にグラーツ大学から論文「トルコ主権の影響下におけるボスニアの精神生活の展開」“The Development of the Spiritual Life of Bosnia under the Influence of Turkish Sovereignty.”で博士号を取得したが学究生活には入らず、外交官となり、大使館員、一等書記官、参事官としてヨーロッパの各首都に在勤し、最後は、ユーゴスラヴィア公使として一九三九年から一九四一年までベルリンに駐在した。前記英訳書序文、及び恒文社版「アンドリッチの人と文学」参照。

【報告】

*本誌の第二二九号（二〇一四年十二月）に掲載された拙稿「山吹のみの、一つだに——太田道灌 雑感」は、本誌編集委員会の快諾によって左記の文献に転載された。本誌編集委員会に一本寄贈されている。

『太田道灌公五百三十回忌記念誌 太田道灌』(NPO法
人 太田道灌顕彰会編 二〇一六年七月吉日)九〇―一〇二頁。